

# 明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)  
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

平勢隆郎  
パソコンで古代史料を読み解く

原洋之介  
エリア・エコノミクスのすすめ

尾崎文昭・巖鋒  
中国図書（大陸系）の電子化状況



# パソコンで古代史料を読み解く

平勢隆郎

『史記』という書物がある。前2世紀、司馬遷が中心となって編纂した歴史書である。我々がこの前2世紀以前の歴史を語るには、『史記』はなくてはならない史料である。現代の人間だけでなく、中国歴代の学者たちも、この『史記』を利用していにしえを語ってきた。

『史記』は、本紀・表・書・世家・列伝から成る。表は各国君主の年代などの一覧表である。書は礼・楽といったテーマ別に記事をまとめる。本紀・世家は各国君主の年代に沿って記事をまとめる。本紀は帝王、世家は諸侯を扱う。列伝は個人の伝記であり、やはり年代を追って記事が記されている。

同じ記事が、本紀・世家・列伝の複数の国や個人の記事として出現することが少なくないのだが、それらは、君主の年代が付記されていることが多いので、表の君主年代一覧によって、前後を決めることができる。現在の出版書は西暦年代がすぐわかるようになっている。

そうして得られた西暦年代であるが、同じ記事に関するものなのにずれる例がかなりある。『史記』全体で、前221年の始皇帝統一までの記事のうち、年代を議論できる部分が2900箇所近くにのぼるが、その約3割の部分が年代矛盾を抱えている。おびただしい数であり、本来放置することは許されない。しかしながら、準備期間まで入れれば『史記』編纂以来今日までの2200年、この矛盾はずっと放置されてきた。

一部の矛盾を議論した学者はたくさんいたが、これほどの数になるとは誰も予想しなかった。私もこの結果に驚いている。『史記』は歴史書である。その年代があぶないというのだからただごとではない。

ただ、年代の矛盾がいくつかあるということぐらいは、古くから知られていたのである。しかし、熱心にその矛盾を調べていった者たちも、すべての矛盾を洗い出すことはしなかった。そして一部を論じつつ結局は袋小路におちいり、自らのテーマの周辺において便法を用いてすましてきたのであった。こんなこ

とを聞いたら、中には、やはり怒り出す方も出るだろう。学者の怠慢である、と。

その学者の流れをうけて、その末席に座る身としては、それもそうだと言ってすませられる問題ではない。歴代の学者のために、少ししいわけもしておかねばなるまい。

歴代、盛んに議論はしたのである。ところが、妙案は出なかった。なぜか。あることに気づかなかったからである。そのあること、というのは、言われてみればそうだ、という簡単なことでもある。しかし、人間というもの、一度作られてしまった常識には、なかなか立ち向かえるものではない。

私も、その人間のひとりであった。たまたまあることに気づいて、それを発展させて、振り返ってみたら、当初の予想をはるかに越え、『史記』の大系の再構築をせまるまでになってしまった、その作業の一端を以下にまとめてみよう。

今日まで矛盾が克服できなかった最大の理由は、称元法の理解が正確でなかったためである。常識によれば、中国古来の制度は、前君主が死去した後もその前君主の年代を継続し、年を越してから改元する。これを踰年改元という。戦国時代や秦の始皇帝のころはまだ年号がなかったので、改元ではなく「称元」（君主在位の元年を称する）という言い方を用いる。

これに対し、我国の昭和・平成の場合に天皇崩御の後すみやかに元年を称したように、前君主死去の年が即位の年であり元年になる、という制度がある。これが実は中国でも一般的であった。この称元法を立年称元法という（「立」は即位のこと）。始まりが違うから、死去の年は、立年称元法の方が踰年称元法より一年多くなる。そのため、立年称元法による在位年として記録されていた死去の年を踰年称元法によると誤解して並べると、代を追ってずれが増えていく。この理由によるずれがかなりある。

戦国時代にあっては、できたての踰年称元法はまだ一部にしか用いられていなかった。この称元法の誤解に暦の誤解、人の取り違え

などが重なって矛盾はとんでもないものになっていたわけである。

これらの矛盾解消には、パソコンのデータベースソフトが有効に使えた。一昔前の整理用カードを著しく機能的にしてくれると考えればよい。私の整理も、カードでできたはずであるが、その作業では時間がかかるから、まだ研究が終わっていなかったであろう。スピードと正確さがパソコンの命である。

ただし、データを入力したのも、それを分析したのも私であった。打ち込みミスもかなりあったから人に助けてもらって修正を繰り返した。将来、書体も含めた専門的漢字データを正確に入力するシステムが確立されるであろうことを思えば、実に原始的な苦勞をってしまったわけである。しかし、みずから入力したからわかったことも多いというのも事実である。「人」としての自負が知らず識らず頭をもたげてきたことに気づいて、はっとすることがある。

さて、こうして得られた、いわば正確なる年代と従来構想されていた年代を比較してみると、前338年に始まった踰年称元法の部分を除くと、ほとんどずれていると言っても過言ではない。年代矛盾の数は膨大だったが、その数すら氷山の一角にすぎなかった。

この正確な年代を、たとえば弁舌の士として有名な蘇秦の列伝に書き込んでいってみると、記事は年代順には並んでおらず、錯綜していることがあらためてわかる。年代矛盾がわざわざいって明確に指摘することを躊躇してきたのは、もはや過去のものとなった。また、年代矛盾をいわばたてにして、あやまった年代観に基づいてなされた議論は、今やその根拠を失った。

従来蘇秦の事跡と思われていた記事で、実は弟の蘇代のものであることが確定された記事を紹介しよう。

その記事は、蘇秦列伝では概略以下のようにある。

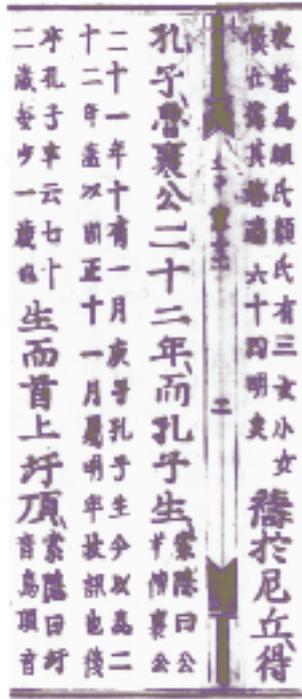
蘇秦は、遊説してまわること数年、大いに困窮して帰郷した。兄弟や兄嫁や妹、妻たちはこれを笑った。蘇秦はおおいに恥じ入った。



(略)



(左右いずれも東洋文化研究所蔵)



『史記』孔子世家(慶長元和間古活字版、無界八行本)

襄公 21 年は踰年法に書き換えられた年次

襄公 22 年は本来の立年法による年次

いずれも西暦前552年のことで同年である。従来これを矛盾と誤解してきた。『春秋』や『左伝』は戦国中期に踰年称元法の議論が始まった頃に作られ、魯国君主の年代記の体裁をとった。その魯君主の年代は踰年法に書き換えられたものであるため、史料中に散見する書き換え前の年代と一年のずれができる。孔子の誕生日、この年の魯暦十一月庚子の日は、ユリウス暦では前552年10月9日になる。

自らを傷つけ、閉室してとじこもり、書物をむさぼった。ある時『周書』の「陰符」を暗唱して、その年のうちに揣摩の術(後述)を会得した。「これで当世の君主を説き伏せることができる」。

この蘇秦列伝よりくわしい記事(部分的には簡略なところもある)が、『戦国策』の秦策に見える。それは、

秦王に十たび上書したが受け入れてもらえなかった。黒貂(クロテン)の皮衣は破れ、黄金百斤は使い果たし、元手がなくなったので秦を去って歸った。

と始まる。「兄嫁は食事の用意もしてくれず、父母は無言のままだった」とも記している。

この説話に関わるものが『戦国策』の趙策におさめられている。説話の時期を決める言葉はまず末尾にあり、「李兌は蘇子に明月の珠と和氏の璧玉、黒貂の皮衣、黄金百鎰を贈

った。蘇子はそれをもらうとこれを元手として西のかた秦に入った」と結んでいる。これを受けて上述の秦策や『史記』蘇秦列伝の記事内容が展開されたことがわかる。また、主父(武靈王)を殺したという前295年の記述も(武靈王は、子の恵文王に位を譲ってからも院政をしこうとして、逆に幽閉され、ついには殺された)。年代整理の結果からすると、蘇秦の死去は前317年であるから、李兌と対話したのは兄の蘇秦ではあり得ないことになる。

実は、『戦国策』には、姚本・鮑本という二つの版本系統があり、いずれが是かの議論がたたかわされてきた。従来、姚本の方を是とする議論が優勢をしめていたのだが、蘇秦・蘇代関係の矛盾を整理してみた結果では、鮑本の方が古い体裁を温存していることがわかった。

「蘇秦」も「蘇子」、「蘇代」も「蘇子」と記される。だから「蘇子」という記事を読んだ者は、いずれだろうと判断をくだすことになる。この判断をあやまれば、混乱を生じる。『戦国策』の鮑本・姚本、そして『史記』の蘇秦列伝の間には、この混乱が多数認められる。それぞれが現在の体裁にまとめられる前に、すでに混乱が始まっていたからである。この混乱を受け、年代矛盾を念頭におくと、さまざまな可能性が議論できることになる。「蘇秦」は実は弟でその兄が「蘇代」だったという議論も出現した。

年代矛盾が克服され、記事を整理してみると、関係する人物の時期も特定できるようになった。どの記事が「兄」のもので、どの記事が「弟」のものかは、容易に判断できる。また、鮑本・姚本ともに「蘇秦」が死んだという記事を掲載しているが、その事件は、前317年に位置づけられた。「蘇代」の記事は、その死去の後にしか出現しない。しかし、「蘇秦」とされる記事は、その前にも後にもある。混乱の元凶は、「蘇子」が誰かの判断を誤り、本来「蘇代」とすべき場合にも「蘇秦」としてしまった点に求められる。

我々は長い間、股に錐をつきさして眠気をはらったという行為を、蘇秦のことだと考えてきた。年代矛盾の存在がこの誤解を支えてきた。しかし、それは弟の蘇代のことであり、兄なきあと、辛酸をなめた末の逸話だったのである。説話の意義づけは、多少異なるものになった。

以上のような新しい年代観による「史料読み解き」作業は、あらためて始まったばかりである。今や身近になり人間くさい道具となったパソコンのおかげで、昔では考えられぬほど迅速に整理が進められた。その整理をまがりなりにも進めてきた目には、おもしろい話題があちこちころがっている。うまく利用したら「宝の山」になるのではないが、そんな期待をこめて学生や若い人に接している昨今である。(東洋文化研究所教授)

# エリア・エコノミクスのすすめ

原 洋之介

東洋文化研究所のような学際的組織でのアジア研究は、どうあるべきか。この課題に答を与えることこそ、研究所の将来計画のスタート・ラインとなる。この難問に一般的に答えることは、ほぼ不可能である。そこで、自分の専門としているアジア経済論という場から、いささか鋭角的に問題提起してみよう。

## 1.

東アジア地域では、20世紀最後の10年間に奇跡から危機へとその経済が大きく動揺した。正統派の経済学者は、奇跡であれ危機であれ、その経済学的説明はまかせておけば十分に多大の言説を生み出してきた。しかし、皮肉なことに、その多数の言説は、新古典学派の普遍志向の市場経済論が、東アジアの経済の動向を全く説明できないことを露呈させている。

新古典派のエコノミストは、東アジア地域は遅れた発展途上国でしかないときめつけ、そこに歴史を通して活発な商業資本主義が存在していたことをしらなかったようだ。そのため、グローバル資本主義の浸透の下で東アジア地域が高度成長をとげたとき、それを普遍的な「市場の力」の成果だと、勝手に受けとってしまった。奇跡といわれた高度成長は、東アジア地域に中世以降存在し続けていた商業資本主義と、欧米で成熟したグローバル金融資本主義とが共鳴して出現したものであった。それは、テキストに書かれた完全競争型市場システムによってもたらされたものではなかった。

経済が危機に入ると、新古典派エコノミストは、突然、東アジアはクローニー資本主義であったが故に危機に陥ったと声高に主張しはじめた。この声におされて、国際通貨基金

は、不効率で不透明な華僑系経営を即刻透明で効率的な多国籍企業にとりかえよという構造改革を要求した。しかし、こういう言説ははからずも、新古典派経済理論では、東アジアの高度成長が説明できないことを明らかにしてしまった。政治の専制体制下で市場の自由が阻害され歪められていたのにもかかわらず、世界が目を見はるなかでかなりの高度成長がみられた。新古典派の理論の下では、この高度成長は全く合理的に説明づけることが出来ない奇跡でしかないことになってしまう。どうした訳か、新古典派エコノミストは、自らの言説のこの矛盾に口をつぐんだままである。ポール・クルーグマンがThe Return of Depression Economicsで的確に指摘しているように、東アジアの経済危機は、グローバルマーケットの勝手な期待で動く信認ゲームの結果ひきおこされたのであって、構造問題とは直接のかかわりをもったものではなかったのだ。

## 2.

「奇跡のアジアも、危機のアジアも、同じアジアである」(濱下武志、「アジアの近代」『岩波講座：世界歴史20』)。我々は、アジア経済研究を、歴史の長期持続性を直視することからはじめる必要がある。現在経済学界で正統派となっている新古典派経済学は、異なった地域の間で、多様な経済・市場取引の形態が存在するという多元性の考えとは相いれない普遍性志向に支えられている。そのため、奇跡も危機も同じアジアであるといった歴史の持続性を的確に解明しうる経済分析の武器にはなっていない。そのため、どうしても我々は、新古典派経済学という呪縛から脱出しなければならない。

幸いなことに、「非協力ゲーム論における

経済学の静かな革命」(経済学部神取氏の表現)のなかで、市場経済のシステムの進化に歴史経路依存性がみられることを説得的に示しうる新しいアプローチが誕生しつつある。この新しい経済理論を導入することで、東アジア経済の個性とその歴史的持続性がそれなりに説明しうるのではないか。筆者は、現在そう考えている。以下説明不足を承知で、簡単にこの経済学を紹介しておこう。

各個人の経済行動に外部効果が存在し主体の意思決定に相互依存関係が発生するときには、他者の行動に対して各主体が抱く期待のあり様が経済パフォーマンスに大きな影響を与える。非協力ゲーム理論が示してくれているように、経済主体の意思決定に戦略的補完性が存在する場合にも、安定的なナッシュ均衡が存在し、人々の経済的行動に制度化されたパターンが生まれそれは自己拘束的になりうる。しかし、人々が他者の行動に関してどうい期待をもつかに応じて、ナッシュ均衡は複数存在してしまうのである。そして、他者への期待が過去の経験からの帰納的推論にもとづく以上、経済のふるまいは歴史に強く規定されることになる。つまり、複数の均衡という束のなかから、どのような均衡がえられるかは、歴史の経過のなかで形成されたその社会の人々が共有している他者理解ないし他者への期待に規定される。この他者期待とは、それが社会のなかで支配的である以上、文化信念とよべるものである。確かに人々の経済行為とは、新古典派が想定するように、利得を最大化しようとする意識的活動である。しかし、この意識されたレベルでの行為は、無意識のレベルでの社会慣習から決して無縁ではない。この事を、新しい経済学のアプローチは明示的にとり入れはじめている訳である。

スタンフォード大学の数理経済史家アブナー・グライフが見事に示してくれているように、家族・同族を重要視する文化信念が共有されている社会と、個人主義的文化信念が共有されている社会とでは、均衡としてえられる経済取引組織化のやり方が全く異なったものとなってくる可能性が非常に大きい(A. Greif, *Cultural Beliefs and Social Organization*, *J.P.E.* Vol.102, No.5, 1994)。こう考えると、経済関係の仕組みをきめる制度とは、非歴史的な新古典派論者が規定しているような功利主義的な選択肢ではないというべきであろう。

東アジアにおいては、公権力による財産権の保護や契約履行の強制が十分でない場合にも、活発な経済取引が存在していた。この経済取引は、もしある商人が仲間商人集団のどれかに対して背任行為をすると、商人仲間から永久に追放されてしまうという集団制裁システムによって契約が守られる形で機能した。そしてこのような集団制裁システムは、商人仲間が同じ宗族や社会集団に属するといった社会的要因によって支えられていた。そのため、歴史を通して、個人主義的文化信念をもつ西欧からは、インサイダー型経済取引として批難され続けてきた。しかし、それでもこの華人のネットワークは現在も生き続けている。

濱下武志氏は、歴史を「コミュニケーションを媒介として成立する、人と人との関係のあり様」という視点から解明していくことの必要性を強調されている(序章、『シリーズ世界史への問い3: 移動と交流』岩波書店)。人と人とのコミュニケーションは、「何らかの意味作用をとまなう人工的記号である情報」の生産・発信・受信を通しておこなわれていく。情報といった視点に焦点をあてたこういう理論的視点から歴史をとらえ直す。濱

下氏のこの提案は、まさに今紹介した新しい経済学のアプローチと整合的なものである。

どういった均衡がえられるにせよ、新古典派がイデオロギーの根拠としているような完全競争型市場が存在しえないことだけは確かである。どんな社会でも、人々は不完全市場のなかで経済生活を営むことになる。そして、不完全である理由や不完全性のあり様は、決してどこでも同じではなく、非常に個性的なものである。そのため、アジア諸国に適した経済政策のあり様を考えるにしても、市場の不完全性に対処する方法も、どこでも一樣という訳ではなく、これまた多様なものとならざるをえない。どのような市場経済にも普遍的に適用可能な政策介入といったものを想定することは、出来ない相談であろう。

### 3.

確かに、経済危機からの回復に際して、経済制度をグローバルな基準に見合うように改革していく必要はある。しかし、我々は経済をみるとき、モラリストになってはいけない。クローニー資本主義だといって、東アジアの経済を批難してみても、その批判は、経済危機の主要因の解明に關して的確をはずしている以上、自己満足しか生み出さない。どんな地域に対しても、「市場の法則」と称される普遍原理にあわせて、個体を効率的なものにとりかえろというイデオロギーを強制しても、効率的で永続しうるような市場経済システムが即座に形成される訳ではない。イデオロギーとしての新古典派経済学が流布させている市場主義とは、Utopian visions of some terminal point after which the underlying harmony of the world simply reasserts itself (H. Kissinger, *Diplomacy*, final chap.) でしかない。それは、

the past has no final claim and the new departures are always possibleとするアメリカの国民的信条にもとづき、かつそこではthe image of a universal man living by universal maxims, regardless of the past, of geography, or of other immutable circumstancesだけが称揚されている。そうである以上、新古典派経済政策論とは、「間違った希望にもとづくユートピア的社会工学」でしかないのだ。

次の世紀をむかえるにあたっては、アジア経済を読みとる我々の視座を見直すことの方がもっと重要であろう。新古典派の普遍志向の市場経済論にとらわれているとき、我々はアジアに対する過剰な期待と過剰な失望を繰り返すことになる。我々自身の東アジア経済に対する見方の動揺がグローバルマーケットの期待を大きく変動させ、ひいてはその期待の変化がアジア諸国の経済に必要以上の影響力を与えてしまう。奇跡から危機へという東アジア経済の二〇世紀最後の十年間の経験は、まさにこの事実を示してくれている。

グローバル金融資本主義のもつ荒々しさの洗礼を東アジアはもろに受けて危機に陥った。危機のなかで次の世紀をむかえざるをえない現在、いま一度個性的な社会の回復とそれらの共存をはかりうる世界経済のあり様を模索するしかない。普遍原理に固執する経済学の正統派に代替しうる見方を作り出すために、市場経済の個性を解明するエリア・エコノミクスArea Economicsをより本格的に構築する必要がある。これこそが、学際的研究にもとづくアジア経済研究の知的責務である。アジアの現実へのこだわりのなかから、既存のディシプリンを再構築していく。そこにしか、「明日の東洋学」が生きのびる途はない。こう確信しはじめている。(センター長)

# 中国図書(大陸系)の電子化状況

尾崎文昭・巖 鋒

中国大陸関係の図書・雑誌・新聞などの資料を扱うにも、近2年ほどのインターネット上での劇的变化に注目せざるを得ない。本文はその一部分を紹介するものだが、この趨勢は、当研究所の図書館の集書方針、予算の配分、研究情報センターの役割などにも大きな影響をもたらすものと思われる。

この数年で目を見張るような進展をしてきた中国学の電子情報化については、これまでも様々な紹介がなされてきた。例えば、『二十四史』データベースで当初から有名であり、近年ますます豊富な古典籍の電子化で知られる台湾の中央研究院については、各所で繰り返し紹介がなされているし、香港中文大学の蔵書検索もよく知られている。また、日本国内および台湾での仏教経典の電子化も顕著な進展を見せている。

本文は、このような紹介ではあまり触れられていない最近の中国大陸関係の関連データベース、および多量に公開されているテキストの状況につき報告するものである。

但し、筆者らは中国近現代文学を専攻するもので、現代の方面に偏ること、また必ずしも全面的というわけではなく、現在のところ目に入っている範囲内にすぎないということ、を、予めお断りしておかなくてはいけない。

## 1. 国家図書館(旧北京図書館)による電子図書館の試み

北京図書館が「国家図書館」と改称されている。おそらく最近のことだと思うが、私はその電子図書館ホームページ(以下HP)で知った。このHPは、北京超星電子技術会社が国家図書館に協力してできたものらしく、その旧版のHPには、「ここからネット上最大の電子図書館に入ります! 5万余種の図書、1500万頁をネット上で無料で閲覧することができます。」と書いてあった。その数量に驚く。

国家図書館(旧北京図書館)が、かねてより電子化に励んでいるとは聞いてた。とはいえず、この夏知り合いの留学生から、彼がコピ

ーを取ろうとして、フロッピーディスクで良いかと聞かれ、良いと言ったら、該当部分をFDに入れてくれたと聞いて、本当に驚いた。中国での事態は、いつものことながら、なかなか変わらないが、変わるときは実に早い。恐らく上述の電子化が進んで、処理がすんだものはFDに落とす方が簡単だということになったのだろう。

さて、国家図書館電子図書館のほうだが、北京超星会社のHP(www.pdg.com.cn/pdg.htm.図)の画面下部に電子図書館の選択場面がある。

国家図書館遠程図書館、国家図書館書目検索系統、広東省中山遠程図書館、上図遠程図書館、ほか

国家図書館書目検索系統は、GBコードでの入力が可能なら、そのまま検索ができる。そのうち、かなり使えるようになるだろう。

重要なのは国家図書館遠程図書館で、当該文字をクリックすると

国図中医図書館、国図計算機図書館、国図文学哲学図書館、国図新書図書館、国図人物伝記図書館、国図歴史図書館、国図科学図書館、国図軍事図書館、国図経済金融図書館、国図档案文献庫、国図工程技术図書館

のリストが出る。先ほどのHP画面左手にある「数字図書館」にも同じリストがある。

例えば、「国図档案文献庫」「中国革命史档案文献庫」「刊物系列」「党的創立時期」とたどってみると、その奥には『共産党』『新青年』『每週評論』『少年中国』の選択があり、その奥に各号のリストがある。

殊に充実しているのは、古典白話小説ではないだろうか。「国図文学哲学図書館」「中国文学」「中国古典小説」とたどると、『水滸伝』以下103種の書名が並ぶ。その中には『三言』もあれば『彭公案』もあるし、『二十年目睹之怪現狀』もある。

総じて、系統的学術的というより、「大衆に奉仕する」という印象が強い。新書にはそれが顕著に出ているし、また「国図歴史図書

館」に収めるのが歴史叙述書・教科書・辞書ばかりであるところにも表れている。

ところで、書籍雑誌本文はPDF画像ファイルで収録しており、普通のインターネットエクスプローラやネットスケープナビゲータのままでは見ることができない。

ここで、北京超星会社が用意する専用のブラウザが必要になる。先ほどの北京超星会社のHP(図)の左上角の「軟件下載」欄あるいは文中のブルー色の「軟件下載欄目」から、中国語(簡体字)用「SSReader 3.4 4 修正版」、英語用の「SSReader 3.4 4 英文版」のダウンロード画面に入る。

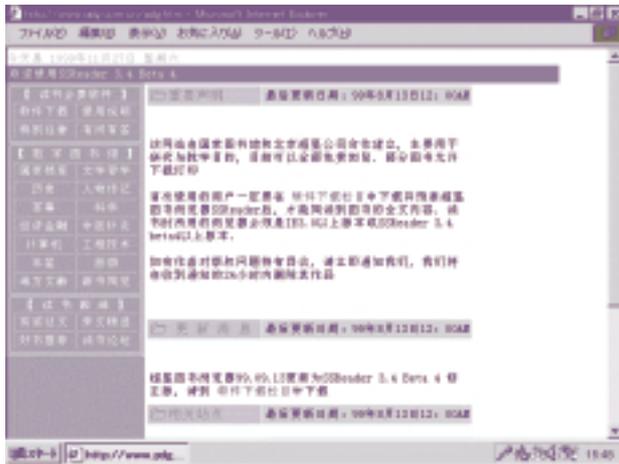
日本語 Windows95/98 環境でなら、英語版のほうが良い。「歴史図書館(lishi.exe)」とともにデスクトップにでも保存したら(1MBあるから少々時間がかかる)、それぞれダブルクリックしてインストールする(lishi.exeをインストールしないと「歴史図書館」の本を見ることができない)。デスクトップに表れる字化けしたアイコンは削除する。

上述の通り一般のブラウザで書名までたどり着き、クリックすると、自動的にSSReaderが起動して、PDF画像ファイルを表示してくれる(実行時、何かをインストールしろと言ってくることがあるがキャンセルしてかまわない)。

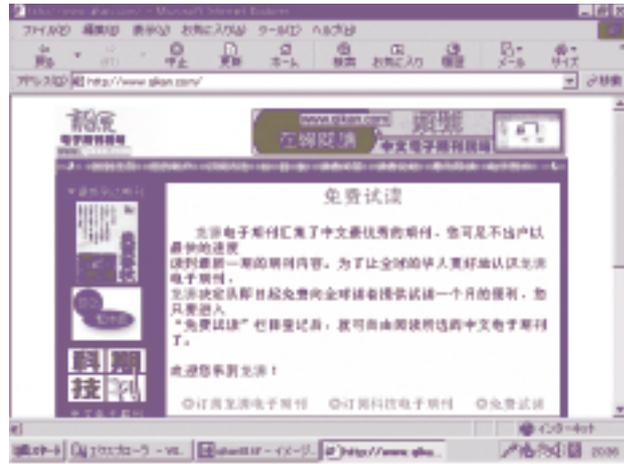
表示されるのは画像であるから、表示に時間がかかる。これは欠点ではあるが、同時に文字のコードに由来するトラブルがないという強みもある。

また、MacでSSReaderが使えるかどうかは試していない。

上海図書館の遠程図書館、および中山遠程図書館は、まだまだというところ。しかし、北京超星会社のデジタル図書館では毎日1000冊20万頁を追加しているというから、こちらも近日中に目を見張るような発展を遂げるであろう。



図



図

## 2. 公開されたテキスト

現在、アメリカに渡った中国人留学生の手による、図書テキストの公開が猛烈な勢いで進んでいる。部分的な古典籍から、現代文学、通俗小説、そして近年の話題書など、全部でどれだけあるか見当もつかない。

この種のサイトの老舗は「亦凡」(www.yifan.net)であろう。最近電子図書館だけを独立させて「亦凡公益図書館」(www.shuku.net)を作っている。

しかし、今は最大のものと思われる「文学城」(www.wenxuecity.net)を紹介する。「中文網略之門」(www.gatechina.com/gb)に所属し、類似サイトを総合したものである。話題の『1957年の夏季』『交鋒』なども「政治文学」として掲載されているが、特に「小説下載」欄でダウンロード用に純テキスト化したものが用意されているのがありがたい。武侠小说が大半だが、『張愛玲文集』や『金瓶梅』『李白詩全集』などもある。

中国大陸発行の雑誌・新聞には、HPで記事・文章を全て公開し、さらにはバックナンバーを含めて、検索・テキスト表示のサービスをするところがある。そのサイトは上記「中文網略之門」「中文報紙・中文雜誌」からリンクが張られているので、ここでは特に詳しくは紹介しない。例として一つ二つだけ挙げると、現在中国大陸でもっとも歓迎されている新聞『南方周末』(www.nanfangdaily.com.cn)や、文化界の動向を最もよく反映する『中華読書報』(www.gmdaily.com.cn)、高級な文学雑誌『鐘山』(www.jsinfo.net/zhongshan)などはお勧めである。また、『中華

読書報』と『読書』は昨年までの全てをCD-ROM化して販売している。

ところで、現在のところまだまだ問題とされていないようだが、特に新書のテキストの公開については大問題がある。つまり著作権と版権の問題なのだが、現状はほとんど無視されている。国家図書館遠程図書館にしてからが、「作者がもし著作権問題に関して異議があった場合には、すぐに我々に連絡されたし。連絡を受けて24時間以内にその作品を削除します」と記すだけである。むしろ本人の承諾などは取っているはずはない。あるいは近い将来のある日、新書については突然一斉に姿を消すのかも知れない。

もう一つの問題は、テキストの信頼性の問題で、たまたま見た、ダウンロード用の魯迅の「中国地質略論」には一部テキストの欠落があった。また版本の問題もある。新聞報道は、後で「訂正」することも可能だし、学術的には信頼性に欠けると言わざるを得ない。

## 3. 「中文電子期刊網点」

(www.qikan.com、図)

新しい傾向では、アメリカのサーバーが代理人となって、雑誌の文章の有償ネット配布をしているところがある。表題のサイトがそうで、年末にはCD-ROMにしてくれるからありがたいし、何しろ安い。日本で専門書店から購入する費用の三分の一から五分の一。国立大学内の当研究所で購入する場合は支払い方法に難点があるが、日本国内の書店が代行してくれれば問題はない。

現在ここで扱っているのは計40点。娯楽性

の多いが、当研究所が現在購入しているものでは、『新華文摘』『当代』『十月』『民主与法制』『中国作家』『人民文学』『中国社会科学』『歴史研究』『天涯』があり、未購入だが有力なものに『文学評論』『戰略与管理』『大家』『百年潮』などがある。

## 4. ネット書店

「北京図書大厦網上書店」(www.bjbb.com.cn)「上海書城」(www.bookwall.com.cn)「万聖書院」(web4.peopledaily.com.cn)また在米ネット書店に「漢林」(www.hanlin.com)、「説明文省略」

以上、注目すべき現象を簡略に紹介してきたが、雑誌や図書の購入の方法、雑誌・新聞の保存方法(マイクロフィルムではなくCD-ROMで)などにおいて、当研究所のこれからの集書方針に再考が必要になってきているということがお分かりいただけたらどうか。むしろ先に述べたように、テキストの信頼性という問題も考慮すべきであるが。

また、既存のマイクロフィルムのCD-ROM(あるいはDVD-ROM)化や、CD-ROMで発売されている過去の雑誌や図書の購入(例えば『四庫全書』)による閲覧の電子化ができれば、日本の新しいタイプの研究拠点として大いに役立つであろう。本年度新設された東洋学研究情報センターの果たすべき役割の一つは、こういう延長線上にあるのではないかと考えている。(東洋文化研究所教授・助教授)

## センター便り



### 設立記念祝賀行事

東洋学情報センターは、東洋文化研究所の附属施設として1999年4月1日に新設された。それを記念して一連の祝賀行事が7月14日(水)に執り行われた。

同日午後2時半から、東文研3階大会議室で記念講演会が開かれ、原洋之介センター長・東文研所長の挨拶の後、研究所の平勢隆郎教授が「コンピューターで古代史料を読み解く」という題の講演を行った。この講演の内容はセンター報本号に収録されている。

休憩後、「情報化時代のアジア研究」というテーマで、研究所の尾崎文昭教授を司会として、パネルディスカッションが行われた。黒田日出男史料編さん所附属画像史料解析センター長のほか、当研究所の田中明彦教授、榎屋友子助教授、研究情報センターの宮嶋博史教授、板倉聖哲助教授がパネラーとして発

表した。その内容は、デジタル化した画像資料のインターネット上での公開とその問題点、現在進行中の研究・プロジェクトの紹介など広範囲にわたり、コンピュータを利用した、日本とアジアに関する先端的研究の現状が窺えるものであった。講演会場は東文研の名誉教授、教官、学生等で盛況であった。

同日午後6時から山上会館で、記念式典と祝賀会が催された。式典では、蓮實重彦本学総長のご挨拶、工藤智規文部省学術国際局長(清木孝悦研究機関課長代読)と尾上兼英本学名誉教授のご祝辞を賜った。また、祝賀会では斎藤修一橋大学経済研究所附属日本経済情報センター主任、廣渡清吾社会科学研究所長よりご祝辞を頂戴し、田仲一成本学名誉教授の乾杯の御発声の後、センターの新たな門出を祝った。

### 設立記念講演会・パネルディスカッションプログラム

附属東洋学情報センター長挨拶	14:30~14:40
原 洋之介(東洋文化研究所長)	
講演 「コンピューターで古代史料を読み解く」	14:40~15:30
平勢 隆郎(東洋文化研究所教授)	
パネルディスカッション 「情報化時代のアジア研究」	15:30~17:30
司 会 尾崎 文昭(東洋文化研究所教授)	
討論者 黒田日出男(史料編さん所附属画像史料解析センター長)	
田中 明彦(東洋文化研究所教授)	
榎屋 友子(東洋文化研究所助教授)	
宮嶋 博史(東洋文化研究所附属東洋学情報センター教授)	
板倉 聖哲(東洋文化研究所附属東洋学情報センター助教授)	
データベース展示	13:00~17:30

### 客員教授

研究情報センターの客員教授として、10月1日付で、深見奈緒子氏が着任した。深見氏は、『イスラーム建築におけるムカルナス・ヴォールディングに関する研究』によって博士号を取得したイスラーム建築史の専門家である。

。「中央アジア圏のムカルナスについての歴史的考察 - - イスラーム建築におけるムカルナス・ヴォールディングに関する研究」『建築史学』22(1994)を初め、イスラーム建築史にかんする多数の論文がある。

東洋学情報センター運営委員会委員  
(1999年度)

#### 所外委員

落合 卓四郎	附属図書館長、大学院数理科学研究科・理学部教授
Ch èn, Paul Heng-Chao	大学院法政学政治学研究所・法学部教授
池田 知久	大学院人文社会系研究所・文学部教授
泉田 洋一	大学院農学生命科学研究科・農学部教授
中兼 和津次	大学院経済学研究所・経済学部教授
黒住 眞	大学院総合文化研究所・教養学部教授
田嶋 俊雄	社会科学研究所教授
小林 宏一	社会情報研究所教授
鶴田 啓	史料編さん所助教授

#### 所内委員

田中 明彦	教授	汎アジア部門
平勢 隆郎	教授	東アジア研究部門(第一)
丘山 新	教授	東アジア研究部門(第二)
小川 裕充	教授	東アジア研究部門(第二)委員長
永ノ尾信悟	教授	南アジア研究部門
後藤 明	教授	西アジア研究部門
鎌田 繁	教授	西アジア研究部門
中里 成章	教授	センター造形分野
宮嶋 博史	教授	センター文献分野
板倉 聖哲	助教授	センター造形分野

#### センター長

原 洋之介 教授、研究所長

#### センターのスタッフ

原 洋之介(はら ようのすけ)センター長・東洋文化研究所長。東南アジア経済。

中里 成章(なかざと なりあき)センター主任・造形資料学分野教授。南アジア近現代史。

宮嶋 博史(みやじま ひろし)比較文献資料学分野教授。朝鮮近代史。

板倉 聖哲(いたくら まさあき)造形資料学分野助教授。東洋絵画史。

鈴木 隆泰(すずき たかやす)比較文献資料学分野助手。仏教学。

深見奈緒子(ふかみ なおこ)客員教授。イスラーム建築史。

佐々木郁子(ささき いくこ)業務掛長。

芳賀 満子(はが みつこ)事務官。

新居 弥生(にい やよい)事務官。

### 明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学  
研究情報センター報 第2号

発行日 1999年12月15日  
編集・発行 東京大学東洋文化研究所  
附属東洋学情報センター  
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
電話 03-5841-5839(直通)  
FAX 03-5841-5898  
東洋文化研究所ホームページ  
<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp>